32

世界文学全集

静かなドン〈I〉

ショーロホフ／原卓也訳

世界文学全集　32

静かなドン　I

ミハイル・ショーロホフ

訳者　原卓也

発行／1971年6月30日　7刷／1977年8月15日

発行者／佐藤亮一　東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社　東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111 振替東京4-808 郵便番号162

印刷所／株式会社金羊社　製本所／新宿加藤製本所

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／文京紙器株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニック株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします　Printed in Japan 1971

目次

第一巻

第一編 …… 5
第二編 …… 135
第三編 …… 284

第二巻

第四編 …… 478
ミハイル・ショーロホフ …… 641

Тихий Дон

М. А. Шолохов

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

静かなドン

（I）

蒼れも高きわれらの土地は
　犁でおこした土地にはあらで、
軍馬の蹄ですきおこす。
蒼れも高きわれらの土地に
　散りしコサック、数知れず、
ドンを飾るが若後家ならば、
われらの父なる静かなドンに、
　花と咲くのはみなし子たちよ。
静かなドンの流れの波にゃ
　父と母との涙がこもる。

われらの父よ、静かなドンよ、
おお、おお、われらの静かなドンよ、
ドンの流れはなぜなぜ濁る？
なんで濁らでおらりょうか？
静かなドンの河底からは、
冷たい泉が湧きでるけれど、
中途で魚が濁すもの。

（古代コサック民謡）

第一巻

第一編

1

メレホフの住いは部落のとっぱずれにある。くぐり戸が家畜小屋のところから北の方ドン河へ通じている。青々と苔の生えた白堊岩の狭間の切りたった傾斜を十五、六メートルおりるともう河岸だ。真珠をちりばめたような貝殻、波に洗われて丸くなった小石の散り敷いているうねうねとした灰色の河べり。そしてその向こうは、風を受けてどす黒いさざ波に沸き立つドンの奔流だ。東側は、脱穀場の柳の生け垣の向こうを、ゲトマンスキイ街道が走り、白っぽいヨモギ、馬の蹄に踏みつけられた、褐色の、生活力の強いオオバコ。街道の分かれ道の礼拝堂。さらにその先には、かげろうのゆらめく広野。南からは白堊の山脈が迫っている。西側は、広場をつらぬいて河原へ走る部落の往来だ。

コサックのプロコーフィイ・メレホフは、この前の、さらに前のトルコ戦争のとき部落へ帰って来た。トルコから、女房を連れて戻ったのだ。女房は小柄な女で、ふかぶかとショールをかぶっていた。いつも顔をかくし、人おじするような、憂わしげな目をめったにあらわさなかった。絹のショールは遠い異国の香を漂わせ、虹色の模様は部落の女たちのねたみを買った。この捕われてきたトルコの女は、プロコーフィイの家の者まで避けたので、親父のメレホフはほどなく伜を別居させ、その後死ぬまで伜の小屋へは顔を見せなかった。受けた侮辱が忘れられなかったのである。

間もなくプロコーフィイは家を建てた。大工たちが母屋を作る。自分でも家畜小屋の仕切りをした。そして秋ぐちには、この新しい住いに、猫背をした異国人種の女房を連れて引き移った。家財道具を積みこんだ荷馬車について女房とふたりで部落を行くと、おとなも子どもみな往来へとび出してきた。コサックの男たちはひげの中で忍び笑いを浮かべた。女どもは声高にののしりかわした。うすぎたない洟たれ小僧たちはプロコーフィイのあとから送り狼のようについて来

ながらわいわいはやし立てた。が、コサックの上着をひっかけた彼は、女房のきゃしゃな手首を黒い掌に握りしめ、ゴマ塩の頭を臆する色なく、ぐいとそびやかし、田の畔をたどるときのようにゆっくりと歩いた。

――ただ、頬骨の下の瘤がふくらんで、ぴくぴくと動いた。いつものとおり無表情の冷然たる眉のあいだにも、じっとりと汗がにじんでいた。

それ以来、彼の姿を部落で見かけることはほとんどなくなった。寄り合いの席へも顔を出さなかった。村はずれのドンにのぞんだ自分の家で、垂れこめた生活を送っていた。彼にかんする奇々怪々な噂が部落中に流れた。牧場への道の向かい側で子牛に草を食わせていた子どもたちは、毎日、夕焼けの色も薄れるころになるとプロコーフィイが両手に女房をかかえて、なんと、タタールスキイの塚まで連れて行くんだぜと、見てきたように話してきかせた。プロコーフィイは塚の上に女房をおろし、何百年ものあいだ蝕まれ穴だらけになった石に寄りかからせ、自分も並んで腰をおろし、長いことじっと広野に見入るのだった。夕焼けがすっかり消えてしまうころまでそうして広野にながめ入り、それから女房を上着でくるみ、両手にかかえて、家へ連れて帰るというわけだ。こういうおかしなふるまいをなんと説明したものか、部落では推測に苦しんだ。女どもはこの話にうつつをぬかし、仕事も手につかぬありさまだった。プロコーフィイの女房のこともいろいろと噂された。絶世の美人だと断言する者もいた。が、他の者は正反対のことをいった。結局、この問題は、部落の女どもの中でも一番あばずれの、兵士の女房のマーヴラが、新しい麹をもらうような顔をしてプロコーフィイの所へ一走りいってきたあとで、はじめていっさいのケリがついた。プロコーフィイが麹をとりに穴蔵へ降りて行ったそのあいだに、マーヴラは、彼の仕入れてきたトルコの女が、これ以下のはちょっと見当たらぬくらいお粗末な女であることを見てとったのである……

しばらくたってから、部落の横町で、頬をまっかにしたマーヴラが、プラトークを横っちょにずらせた姿で、集まった女どもに向かって吹聴していた……

「ねえ、ちょいと、あの人ったら、ほんとによ、あんな女のどこがいったい気に入ったのかねえ？　まあせめて、女といえるしろものならまだしもだけどさ、まったく……ぶくんぶくんにふくれていて……見られた

格好じゃないんだよ、ほんとにさ。ここらの娘っ子のほうが、同じふくれるにしたって、もうちっと格好がついてるよ。あれじゃまるで黄蜂みたいだもん。腰から二つに切れちゃうよ。それに目ときたら、真っ黒けですよ、胸くそがわるいったらありゃしない。そのうえまるで悪魔みたいに、その目でぎょろっと見るんだからねえ。おお嫌だ、きっとありゃ、おなかが大きいんだよ、そうさ、もう生み月が近いんだよ、きっと！」

「生み月が近いんだって？」女たちはびっくりした。

「それに違いないよ。あたしゃこう見えても、三人もとりあげをやったんだからねえ」

「そりゃそうと、その女、顔はどうなのさ？」

「顔かい？　真っ黄色だよ。どろんとした目でね。きっと知らぬ他国にいるのがおもしろくないんだろ。あ、そうそう、そいからね、あんた、あの女は亭主のズボンはいてるんだよ」

「へえーえ」女たちは驚きあきれて、いっせいに声をあげた。

「あたしゃ、この目でちゃんと見たんだから……亭主のズボンはいてるんだからね。ただ縁に縫取りがしてないだけなんだよ。亭主のふだんばきをくすねたんだね、きっと。おまけにその上に長いシャツをひっかけてんだけどよ、そのシャツの下からズボンがのぞいているんだもの、裾を靴下につっこんではあるけどさ。あたしゃ、見たとたんに、ぶるぶるっとなっちゃったよ……」

プロコーフィイの女房は魔女だ、という噂が村中にささやきかわされた。アスターホフの家の嫁が（アスターホフ一家は部落中でプロコーフィイの家にいちばん近い所に住んでいた）神に誓って断言したところによると、聖霊降誕祭の二日目のこと、まだ日がのぼらぬうちに、プロコーフィイの女房がプラトークもかぶらず、そのうえ素足で、アスターホフの家の家畜小屋で、牛の乳をしぼっていたということであった。そしてその日以来、この牝牛の乳房は子どもの握り拳くらいにしなびてしまい、乳が出なくなり、やがて死んでしまったという。

この年はかつてないほど、家畜の疫病が猛威をふるった。ドンの河沿いの畜舎では、毎日牝牛や子牛の死骸が河原に累々と横たわる始末であった。悪疫は馬にうつった。部落の牧場に遊ぶ馬の群れがしだいに減った。そこでまた、不吉な噂が部落の通りや横町をはい

まわった……
コサックたちが部落の寄り合いからプロコーフィイのところへやって来た。
主人は会釈をしながら、表階段へ出て来た。
「これはこれは、おそろいで。どういうご用向きで？」
人々は階段の下まで押しかけたものの、唖のように口をつぐんでいた。
やがて、一杯機嫌の老人が口火を切ってがなりたてた。
「手前ンとこのあの化け者を、ここへしょっぴいてこい！　裁判にかけてやっから！」
プロコーフィイは身をひるがえして屋内へ駆けこもうとした。が、入り口の所で追いつかれた。
リューシニヤ（へちま）というあだなで通っている砲兵上がりの大男が、プロコーフィイの頭をごつんごつんと壁につき当てながら言いきかせた。
「騒ぐな、騒ぐな、なにも騒ぎ立てることはねえ！……おめえをどうこうするというんじゃねえ、おめえのかかあを地面に埋めちまおうっていうんだあな、牛や馬がいなくなって村全体が滅びるよりゃ、あの女をかたづけちゃったほうがいいってことよ。だからおめえはじたばた騒ぐな、それでねえと、野郎、壁にぶっつけて、頭をぶっかくぞ！」
「女を、庭へしょびき出せ！……」
階段の下で大勢の者がわめき立てた。プロコーフィイと連隊でいっしょだった男が、片手にトルコ女の髪をぐるぐるまきつけ、一方の手で、せいいっぱい大きくあけて泣き叫ぶ女の口をしっかと押え、飛ぶような勢いで、玄関から外へひきずり出して、人々の足下へたたきつけた。ヒーッという女の叫びが、吠えるような大勢の声の壁をつんざいた。プロコーフィイは六人ものコサックを投げとばして、自分の部屋へとって返し、壁にかかっている長剣をもぎとった。コサックたちはひしめき合って玄関から逃げ出した。かちゃかちゃという音を立てて抜き身の剣のきらきら光るやつを頭上高く振りまわしながら、プロコーフィイは階段を駆け降りた。群集は震え上がり、蜘蛛の子を散らすように庭のあちこちへ退散した。
納屋のあたりで足のおそい砲兵上がりのリューシニヤに追いつくと、プロコーフィイは左の肩先から腰骨のあたりまで、袈裟がけにばっさりとうしろから一太刀浴びせた。コサックたちは生け垣のくいを踏み倒

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

し、脱穀場をぬけて、広野へ逃げた。

三十分もすると、勇気をとり戻した群集は、ふたたびこの家へ押し寄せた。斥候の役をつとめているふたりの男が、身をすくめながら、玄関に足を踏み入れた。台所の敷居の上に、ぶざまに頭をのけぞらせ、血の海の中に身をひたして、プロコーフィイの妻が倒れていた。苦しげにむき出された歯と歯のあいだで、噛み切られた舌がひくひくと動いていた。プロコーフィイは頭を振りながらも、じっとひとみをすえて、ぴいぴいと泣く赤いぬらぬらしたかたまりを羊皮の外套にくるんでいた——月足らずで生まれた赤児である。

プロコーフィイの女房はその晩息を引き取った。月足らずで生まれた赤児は、祖母に当たるプロコーフィイの母親が不憫に思って引き取った。

赤児は蒸したふすまにくるみ、馬の乳をのませて育てた。そして一カ月ばかりたち、トルコ人の血を受けた浅黒いこの赤児がじょうぶに育っていきそうだという見通しがつくと、教会に連れて行き洗礼をうけさせた。名前は祖父のそれをとってパンテレイとつけた。プロコーフィイが懲役から帰って来たのは十二年後である。短く刈った白髪まじりの赤茶けた顎ひげやロシヤ服のせいで、コサックとは思われぬ、見知らぬ人のようになっていた。プロコーフィイは息子をひきとり、家業についた。

パンテレイは大きくなるにつれて、色の真っ黒い、始末におえぬ若者になっていった。顔立ちと猫背のからだつきは母親そっくりだった。

プロコーフィイはこの伜を近所のコサックの娘と夫婦にしてやった。

このときから、トルコ人の血がコサックの中に交じったのである。これ以来、「トルコ人」とあだなされる、鈎鼻の、粗暴な美しさをそなえたコサック、メレホフの一族が、部落にふえていったのだ。

父親の野辺の送りをすませると、パンテレイは家政に身を打ちこんだ。屋根を新しくふき直し、遊んでいた土地を半ヘクタールばかり宅地にまわして、ブリキ屋根の納屋と物置きを新たに建てた。屋根屋は主人の注文で、ブリキの裁ちくずで雄鶏を二羽こしらえ、納屋の屋根にしっかりと取りつけた。この雄鶏ののんびりとした格好が、メレホフの家になに不足ない豊かな感じを与えて明るくした。

老境にさしかかったにもかかわらず、パンテレイ・プロコーフィエウィチはますます元気だった。少し腰は曲がったものの、横幅などはむしろふとったくらいである。がやはりかっぷくのいい老人というふうに見えるのは争えなかった。骨が枯れ、跛をひいて歩くのだった（若いころ、天覧競馬で左足を骨折したのである）。が、とにかく彼は、左耳に銀の半月形の耳飾りをつけ、この年になっても黒い髪や顎ひげが色の褪せることもなく、怒ったら最後、我を忘れてしまうほどで、かつては美しかった妻が年よりも早くふけ、今ではぶたぶたと肥えふとり、蜘蛛の巣を張りめぐらしたみたいに、顔じゅう皺だらけになったのも、どうやらこのためらしかった。

長男のピョートルはもう自分の家庭を持っていたが、母親似だった。背は高くなく、獅子鼻だ。よく成育した根なし葛を思わせる小麦色の髪、褐色の瞳。弟のグリゴーリイは父親に瓜二つで、ピョートルより六つも年下なのに頭半分だけ背が高かった。父親のような垂れさがった鷲鼻、こころもち釣り上がった目の青みがかった燃えるような瞳。頬骨のけわしい線は紅をさしたような褐色の皮膚におおわれていた。父と同じくやはり猫背で、笑顔にさえもこのふたりは共通の、どこか獣的なところが見られるのだった。

父親っ子のドゥニャーシカは、手のすらりと長い、目の大きい少女だ。それにピョートルの妻ダーリヤと幼い子ども——これがメレホフ一家の家族の全員である。

2

夜明け前の灰色の空に星がまばらにまたたいていた。垂れこめた雲の下から風が吹いてくる。ドン河の流れの上に霧がまき起こり、白堊岩の山腹をうねうねとねって、頭のない灰色の蛇よろしくの格好で、峡谷にすべりこんでいく。左岸の険崖、砂州、いくつもの沼池、葦の生い茂った淵、しっとりと露にぬれた林——これらのすべてがうっとりとなるような冷涼な朝焼けに燃え始めた。日はまだのぼらず、地平線のかなたに思い悩んでいた。

メレホフの家では、パンテレイ・プロコーフィエウィチがだれよりも早く目をさました。小さな十字の縫取りのあるシャツの襟ボタンを、歩きながらかけ、表

階段へ出た。草の生い茂った庭には銀色の露がしとどにおりている。家畜を小道に出してやった。ダーリヤが肌着姿で牛の乳をしぼりに走りぬけて行った。素足の真っ白な脛に露の玉が初乳のようにはねかかり、庭をよぎって草の上に踏みつけられた足あとが、煙ったように残った。

パンテレイ・プロコーフィエウィチは、ダーリヤに踏みつけられた草がふたたびしゃんと立ち直るのをややしばらくながめてから、居間にもどった。

開け放たれた出窓の上に、はや散りかけた前庭の桜の花びらがいくつか落ちて、色あせたばら色の斑点を見せていた。グリゴーリイは片手を投げだし、うつ伏せになって眠っていた。

「グリーシカ、釣りに行かんか？」

「なんだよ？」口の中でつぶやくようにききかえして、グリゴーリイはベッドから両足をずりおろした。

「おい、舟を出そうぜ、朝釣りに行こうじゃないか」

グリゴーリイは鼻で荒い息をしながら洋服掛けからふだんばきのズボンをとってはき、その裾を白い毛糸の靴下の中へ突っ込んだうえで、つぶれた踵を直しながら、のろい動作で短靴をはいた。

「おっ母さんはまき餌を煮といてくれたかな？」

父につづいて玄関口へ向かいながら、かすれ声でグリゴーリイはたずねた。

「ああ、煮てあるよ。舟のほうへ行っとこれや、おれもすぐ行くから」

老人は壺の中へ、蒸し立ての香ばしいライ麦をすくい入れ、落ちた穀粒までたんねんに手のひらに拾い集め、それから左足を引きずり引きずり、畔をひいて坂にかかった。グリゴーリイはしかめっ面で舟の中にすわっていた。

「どこへ行く？」

「《黒崖の淵》へ行ってみよう。ほら、こないだ一度舟つないだろう、あの木の株が沈んでるところ。あの辺で一つやってみようぜ」

小舟はともで河底の土を一つとんと蹴ると、ふわりと水に浮かび岸を離れた。ちょっとでも隙があったら転覆させてやれとばかり、ゆすりにゆすって急流が舟を運んだ。グリゴーリイは櫂をあやつっているだけで、あえて漕ごうとしなかった。

「漕げよ、おい」

「そいじゃ、真ん中へ出そうよ」

急流を横切り、舟は左岸に向かって進んだ。部落のほうからときをつくる鶏のこえが水面をわたってこだましてくる。ふなべりで水面を切り、揺れ動く黒い澪を引きながら、舟は崖下の淵に着けられた。岸から十メートルほどのところに、沈んだニレの木の何本も枝をひろげているのが、水の上からも透けて見えた。ニレのまわりで渦巻く水が褐色の泡のかたまりを追っている。

「ほどいてくれ、おれが寄せ餌をするから」

父親はグリゴーリイにこう耳打ちすると、湯気のたつ壺の口へ手をつっこんだ。

麦は水面に一粒一粒数えられるほどうまくまき散らされた。まるでだれかが「うまいぞ！」と小声でほめてくれたように思えるほどの手際だった。グリゴーリイは釣り針にふくれた麦をつけながらにっこりした。

「釣れろよ、釣れろ、鯉でも雑魚でも遠慮はねえぞ！」

いくつか円を描いて水にはいった糸は、ぴんとはりつめ、ふたたびたるんだ。錘がかすかに底の土に触れたのだ。グリゴーリイは竿の端を足で押え、なるべく動かないように気をつかいながら、タバコ入れを取り出した。

「かからねえだろうぜ、お父っつあん……月がかけてるから」

「マッチ持ってきたか？」

「うん」

「火を貸せ」

老人はタバコを吸いつけると、例の木株の方角の、雲にかくれる太陽をながめた。

「鯉って魚は、こりゃ釣れるときがいろいろあるんだよ。なあに、月がかけてるときだって、ちょいちょいかからあ」

「こりゃ驚いた、雑魚が餌をとりやがる」グリゴーリイがこう言ってため息をついた。

舟べりでばちゃっという音を立てて水がひいた。と思うと、一メートル半もある、まるで赤銅で鋳たような鯉が、ゴボウの葉を思わせるような尾びれを水の上で二つにくねらせ、うなり声をたてて跳ね上がった。大粒のしずくがざあっと舟にかかった。

「よおし、今にみとれ！」パンテレイ・プロコーフィエウィチは水しぶきをあびた顎ひげを袖口でぬぐった。

水底のニレの木のわきの、長くのびた何本もの裸枝のなかで、一度に鯉が二匹跳ねた。さらにもう一匹、いくらか小ぶりのやつが、空中高く跳ね上がるような勢いで、何度も何度も執拗に、崖下のあたりで身をくねらせた。

グリゴーリイは手巻きタバコのぬれた吸い口をじりじりしながら噛んでいた。どろんとした太陽がカシの木の半ばほどの高さまでのぼっていた。パンテレイ・プロコーフィエウィチは餌をすっかり使いはたしたので、ぶすりと不興げにおし黙って、少しも動かぬ竿の先をぼんやりながめていた。

グリゴーリイはタバコの吸い残りをぺっと吐きすて、それがツバメのような早さで流れ去るのを、いまいましげに目で追った。口にこそ出さなかったが、夜明け前からたたきおこし、ゆっくり寝させてくれなかった点で、父を恨んでいたのである。空きっ腹へやけにタバコを吸ったので、口中が毛でも燃したようにきな臭かった。水をすくってのもうと思い、かがみかけた。とそのとたん、水面から三十センチばかり出ていた竿の先がかすかにふるえて、ゆっくり沈んだ。

「よし、食ってくれ！」老人が、こう言ってふっと息を吐いた。

グリゴーリイは踊る心で竿を引いた。が、竿の先はぐんぐん水中にもぐり、竿全体が手元から弓なりにしなった。まるでまんりきにでもかけているかのように、恐ろしい力が強靱な柳の竿を、水底へひきずりこもうとするのである。

「放すなよッ！」老人は突き当たりそうになる舟を岸壁からおし離しながら、こううなるように言った。

グリゴーリイは竿を上げようと思って、全身の力をふりしぼった。が、だめだった。かわいたような音がして、太い糸がぷっつりきれてしまったのである。グリゴーリイは勢いあまってよろよろっとなった。

「えい、くそ！」針になかなか餌がつけられないので、パンテレイ・プロコーフィエウィチはいまいましそうにつぶやいた。

グリゴーリイは興奮して、引きつるような笑いを浮かべながら、新しく糸をつけて投げこんだ。

と、またも、錘が水底まで沈んだか沈まぬうちに、竿の先がぐぐっとしなった。

「おっと、野郎、来やがったな！……」グリゴーリイ

は鼻を鳴らし、急流のほうへのがれようと足掻く魚を、底から引き離そうと努力した。

糸がひゅうとうなりを生じて水を切り、つづいて薄緑色の縞をつくって、水がもくもくと帯のように斜めに盛り上がった。パンテレイ・プロコーフィエウィチは節くれ立った指でたもの柄を握り直した。

「まわすようにして上へ引きあげろ！　しっかり持ってろよ、それでねえと、ぷつりと糸をやられるぞ！」

「だいじょぶだよ！」

黄色味を帯びた大きな緋鯉が水面に姿を現わし、がばがばと水を泡立てた。が、額のひろいまる味がかった頭をひるがえして、ふたたび深みへ潜入した。

「骨折らせやがるなあ、手がしびれるぐれえだ……いけねえ、こら待てッ！」

「グリーシカ、しっかりおさえてろよ！」

「おさえるとも！」

「気をつけろ！　舟の下にもぐらせるんじゃねえぞ！気をつけろよ！」

息を切らせながら、グリゴーリイは横腹を見せた鯉を舟のほうへ引き寄せた。老人はたもを突っこみに掛かった。が、鯉は最後の力をふりしぼって、またもや深みへ逃げこんでしまった。

「頭のほうを持ち上げろ！　姿婆の風を一口すわせりゃ、静かにならあ」

水面へ引き出すように加減しながら、グリゴーリイはグロッキイになった鯉をふたたび舟のほうへたぐりよせた。鯉は大きく口を開けたまま、ざらざらした舟べりに鼻をぶつけると、オレンジがかった金色のひれを震わせ、きらきらと光らせながら動かなくなった。

「しとめたぞオ！」と、パンテレイ・プロコーフィエウィチは、たもにその大鯉をすくいながら、うめくような声で言った。

さらに三十分近く釣っていた。鯉の跳ねる音がしなくなった。

「おい、グリーシカ、もう糸を巻けや。きっと最後のやつを、釣り上げたんだろ。これ以上ねばったって始まらねえや」

帰り支たくができた。グリゴーリイは舟を岸からつきはなした。帰り道を半分ほど来た。グリゴーリイは父がなにか言いたそうにしているのを顔つきで知っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton